

まんがに見る野國總管像

沖縄いもづるの会

いは かつお
伊波 勝雄

はじめに

昨年の2025年は、沖縄県嘉手納町出身の野國總管が1605年に中国から甘藷を持ち帰ってから丁度420年の節目を迎えた。

嘉手納町では、野國總管の遺徳を称え、偉業の継承発展と甘藷の振興を目的として、野國總管甘藷伝来420年祭の記念事業を開催した。

記念事業では、「甘藷、ふたたび世界へ！」

をテーマに、矢野哲男氏による沖縄県「いもの日」特別講演や、「野國總管とその時代」をテーマに、伊波勝雄による基調講演が行われた。講演では、多くの示唆を受けた。

パネルディスカッションは、コーディネーターに与那嶺松一郎氏、パネリストに矢野哲男氏、岡田吉弘氏、山田英次氏、ベリー・ドゥエル氏、金田富夫氏、伊波勝雄の7名が登壇し、「命を繋ぐいも～未来へ



～」のテーマで議論を交わした。甘藷の発展と伝来430年祭に向けての貴重な提言を受けた。

記念事業の一環として、子どもたちにも野國總管の偉業を伝えたいとの思いから、嘉手納町内の小学校4年生向けに「ふるさと学習」の副読本「まんが野國總管ものがたり～お芋さんがつないだ命の歴史～」を発刊した。

以下、本「まんが」の概要について、絵コンテを用いて紹介する。

1. 野國村とマチュー

野國總管（童名・マチュー）は、東シナ海に面した野國村で生まれ育った。この村は台風の常襲地帯で、干ばつも起こるし、塩害も受ける。

農産物は、米、麦、粟、ヒエなどの穀類である。地上で育つこれらの作物は、台風や日照りなどの自然災害に遭うと、たちまち凶作に見舞われる。農業で生計を立てるには、かんなんしんく 艱難辛苦の伴う寒村であった。農民たちは、日々の食べ物にも事欠き、飢えや

餓死者も出るなど、とたん 塗炭の苦しみ^{とたん}に追い込まれた。

マチューは、何とかこの境遇から抜け出し、農民たちを救う手立てはないものかと思案した。そして、その願望を叶えるため、村を出ることを決意した。

2. 久米村で丁稚奉公

人が寄り集まる所には、何か得られるものがあるに違いないと考えたマチューは、人々で賑わう那覇の街を目指した。辿り着いたのは、中国帰化人の街・久米村であった。久米村は、1392年に閩人びんじん三十六姓によって築かれた街で、閩人三十六姓とは、進貢貿易の担い手として中国から招かれた、様々な知識を持った技能集団である。

マチューは、運がいいことに、久米村の有力者で中国との進貢貿易にも携わり、琉球王府にも顔の利く人物のもとで、でっちぼう 丁稚奉公^{でっちぼう}として働くことになった。そこには、主人に仕える書生もいた。修行するには、うって付けの環境である。

志を持った人間は強い。マチューは、奉



公人として一心不乱に働き、主人の目をひいた。また、書生とも親密な関係を結び、中国語を習い覚え、中国の読み書きなどの学問の習得にも励んだ結果、成人に達した頃には、中国人並の素養が身に付いていた。

中国人の作法を身に付けたマチューは、進貢貿易に従事する人々と接するうちに貿易に興味を持ち、豊かな文明大国、中国への憧れを抱くようになった。そして、いつの日か中国へ行ってみたいという大望を抱くようになった。

3. マチュー総管職に就く

苦節十余年にしてマチューの道が開けた。中国に渡る時がやってきたのだ。しかも一介の乗組員としてではなく、進貢船を管理する「總管職」という大任を負っての中国渡航である。百姓出の丁稚奉公人が總管職に就くというのは前代未聞である。それは、マチューの優れた能力と厚い信望が評価されての大抜擢であった。

總管職は、乗組員の世話や指揮監督に当たるほか、渡航の守護神を祀り航海安全を





司る役目もあり、重大な責務である。總管職に就くには、童名「マチュー」の名では体裁が悪いので名を改めることにした。出身地の「野國」と職名の「總管」を取り、「野國總管」と威厳に満ちた名が付けられたのである。

中国への渡航団は、2～4隻で船団を組み、総勢150～250人が海を渡った。那覇から福州までは1～3週間の日程を要する。航海は、季節風を利用した風と波と帆任せの旅であった。風向きが変わると船が難破し沈没する恐れもある。板子一枚下は地獄である。沖縄の方言で「あの世に逝く」こ

とを「唐旅」と言った。それほどに当時の中国行きは、まさに死を覚悟した死ぬか生きるかの命がけの航海であった。

4. 中国に渡る

野國總管らに乗せた進貢船は、無事に中国福州の港へ到着した。一行は、福州の人々の歓迎を受け入国した。不安を抱えた船出は、やっと安住の地を得た。滞在先は、福州の琉球館である。ここは進貢使一行の宿泊所であり、北京への中継地、商取引の拠点としての役割を果たしていた。

到着した一団は、その後二手に分かれた。



20人ほどの正使を含む使節団は、中国皇帝に親書と献上品を持参して北京を目指した。残りの残留組は、中国人や東南アジアの人々を相手に商取引を始めた。

残留組の野國總管は、他の人と違い、商取引には全然興味がない。元は農民、中国の農業に興味を持ち、自然と農村に足が向いた。

5. 甘藷との出会い

野國總管は、堪能な語学力を生かし、街の人々と交流を深める中、農村を隈なく歩き回るのが日課となった。中国は広くてでっかい。野国村と比べると、桁が違い過ぎる。農地は、水平線の彼方まで続き、いろんな農作物が畑を覆い尽くしている。自然の豊かさに目を奪われた。

そしてある日、ある時、偶然にも地中で育つ作物を見つけ、思わず「くりやさ！！（これだ）」と感嘆の声をあげた。甘藷と出会った瞬間である。感動のあまり我を忘れた。この作物さえあれば、野国村の人々を飢えから救えるかもしれない―。我に返り、すぐに甘藷の値付けから収穫・活用法などを事細かく聞いた。そして、琉球へ持ち帰る準備を進めた。

6. 野國總管と儀間真常

進貢船は、任務を終え帰路についた。野國總管は、鉢植えにした甘藷を携え、無事那覇の港に着いた。時は1605年。わが国に甘藷がもたらされた瞬間である。その年を起点に甘藷の歴史が動いた。

久米村では、野國總管の帰国の祝宴が開かれた。その席上、突然、「野国村に帰り、甘藷栽培を始める」と告げたので一同は、皆びっくり仰天した。

野國總管は、栄達の道を断念して野国村に帰り、甘藷栽培を始めた。そして近隣の村の人々にも苗を分け、植え付けを始めた。予想した通り、半年後にはみごとな甘藷が実り、それを甘藷を食した人々は、「うまい！」と叫び喜んだ。この光景を野國總管は満足した面持ちで眺めた。

甘藷栽培を耳にした儀間真常は、野国村を訪ね、野國總管から甘藷の栽培、食べ方などいろいろ聞いた。野國總管は、懇切丁寧に教えた。その後、儀間真常は、芋づるを差し込む簡便な方法を編み出し、その簡便さが甘藷の普及を加速させた。

この運命的な二人の出会いにより、甘藷は、1620年代には全琉球に広まり、人々の主食となり、琉球の食糧事情に革命をもた





らした。その恩恵は、計り知れない。

7. 日本人の命をつないだ甘藷功労者

琉球にもたらされた甘藷は、やがて薩摩（鹿児島県）の種子島、山川、長崎の平戸などに伝わった。薩摩や長崎では、飢饉が起こっても餓死者は出ていない。それを知った徳川8代将軍徳川吉宗は、江戸で甘藷研究に取り組んでいた青木昆陽に甘藷栽培を命じた。昆陽は、薩摩から種芋を取り寄せ、江戸の小石川の薬草園で甘藷栽培に

成功した。その後、甘藷は「さつまいも」の名で全国へと伝わった。

日本は、戦後の一時期、食糧難に陥り人々は飢えで苦しんだ。その窮乏^{きゆうぼう}を救ったのは、短期間で収穫できる甘藷である。甘藷は、国会議事堂前など至る所で栽培され、日本人の命をつなぐヒーローとなった。その功労者は、野國總管、儀間真常、青木昆陽の3人である。



8. 野國總管の遺徳の継承

甘藷発祥の地、沖縄県嘉手納町では、野國總管が体現した進取の気象、国際性、社会貢献の3つの遺徳を師表に掲げ、その具現化に努めている。

おわりに

今、学校では、子どもたちが住んでいる地域のこと、歴史のこと、地域の人物などについて学ぶ機会が少ない。「国際化は自

分たちの足もとから」と言われるように、地域学習は教育活動の根幹をなす大切なものである。地域を学ぶことは、日本を知り、世界を知ることにつながり、多角的に物事を見る目が養われ、やがては国際感覚が磨かれるようになる。

こうした意図のもと、嘉手納町が生んだ偉人、野國總管を取り上げ、子どもたちにわかりやすいようにと、まんが本を作成した。幅広い活用を願う。

